

私の祖父は、昨年七月、喉頭癌と診断された。病気が分かった時には食べることもできず、手術もできない状態だった。放射線治療を行っている間は、新型コロナウイルスの影響もあり、家族の面会はできず、病院の入口で窓ガラス越しに涙ながらに電話で会話をした。オンラインでやり取りをするのが精いっぱいだった。その後、十月から祖父は在宅ケアとなった。在宅ケアでは、ケアマネージャーという人が来てくれて、祖父に合わせてリビングやトイレに手すりをつけてくれた。また、訪問介護の人が来てくれたり、週一回、リハビリに通ったりしていた。少しずつ動けなくなる中でも、リハビリは祖父にやりがいを与えてくれた。二月にはわずかながらも一緒に食事をするようになった。何を食べたいかと聞かれ、私は

「祖父と同じ物が食べたい。」

と答えた。最後に一緒に食べたすき焼きの味を私は今でも忘れない。その後、今年の三月下旬から入院となったが、五月下旬には看護師さんのすすめもあり、再び在宅ケアとなった。

祖父が亡くなる一週間前からは、毎日訪問看護の看護師さんが来てくれた。看護師さんが薬の説明をしてくれて、祖父も安心した様子だった。お医者さんも来てくれた。一緒に外国の話をして、祖父に楽しみを与えてくれた。亡くなる二日前に吐血した時には、夜中だったのにも関わらず、電話をしたらすぐに看護師さんが駆けつけ、点滴で薬を入れてくれたそうだ。残念ながら祖父は亡くなってしまったが、最期の時を一番落ち着ける家で迎えられたことを祖母は喜んでいて、祖父もきっと喜んでいてに違いない。

こうした医療の体制は、社会保障関係から成り立っている。家庭で手すりをつけるとなると多大な負担になるが、社会保障制度のお陰で、安くレンタルできたのだそうだ。この制度がなければ、祖父は最期の時を家で迎えることはできなかつたかもしれないと考えると、医療体制の充実には感謝しかない。

国税庁のホームページによると、社会保障関係費は、歳出の三割を超えている。また、二〇二三年、六十五歳以上の割合は過去最高の二十九パーセントを越えているという。今後も社会保障はますます充実しなければならなくなるのであろう。これまで税金というと「無駄づかいをされているもの」という印象しかなかった。しかし、今回の祖父への支援を通し、税金に対する印象が少し変わった。私達の生活を支えるためにも使われているということだ。税に対する考えをもつためには税への知識がなくてはならない。正しい知識をもった上で、改めて自分の考えをもち、五年後有権者として自分の考えを示すことができるようになりたい。